OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教と哲学の妄想を笑う ： ルキアノスの諷刺文学とファンタジー（その一）
Author(s)	内田, 次信
Citation	文芸学研究. 2008, 12, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50904
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教と哲学の妄想を笑う

――ルキアノスの諷刺文学とファンタジー（その一）――

内田次信

一 『ペレグリノスの最期』（前篇）

Ⅰ．オリュンピアにおける焼身のドラマ

(1) 大神ゼウスとも張り合える男

「わたし」、ルキアノスが、古代最大の競技祭に舞台を提供したオリュンピア（オリンピア）郊外にある、今日で言えば選手村的な機能を果たした町エリスに着いて、その体育場の区域を通り抜けようとしたときのことである。一人の男が――テアゲネスと言う名で、犬儒派哲学者また新宗教の教祖的な人物ペレグリノスの弟子であったが――、聴衆の前で、この派に慣わしの辻説法的な絶叫的な口舌で「徳を呼ばわり」――徳の女神よ、照覧あれ、などと呼びかけ――、「あらゆる者をひっくるめて罵倒」していた。どいつもこいつも、という口ぶりで、当今の徳のない風潮に憤っていた、というわけである。

これは、徳や正義のたいせつさを説いたヘシオドスの慨嘆を思い出させる（『仕事と日』106 以下）。彼の人類史の論では、神々のように生き、労苦を知らず、平和な生活を送った人々の至福の黄金時代から、人類が、白銀時代、青銅時代へとだんだん堕落してゆき、第四の英雄時代にはいったん人間の質や幸福度は好転するものの、第五の鉄の時代に至ってその悪徳と不幸は頂点に達し、親を敬わず、神を蔑し、正義や善良さをありがたがらず、邪な言葉で人をだます者たちとなる、と言われる。鉄の時代が、ヘシオドスに言わせると、「現代」の状況であり、こんな時代に自分は生まれるべきではなかった、と嘆く詩人は、

不死なる神々の一族のもとへ、人間を置き去りにして、
「恥」と「公憤」は立ち去る（『仕事と日』199 以下）

と述べ、人間にはつらい苦しみだけが残されると締めくくっている。この鉄の時代の描写においては、白銀から英雄時代に関してはよく使われた暴力や乱暴や戦の語はあまりなく――一箇所だけ「正義は腕力の中にある」(192)と言われるだけで――、もっぱら人間の悪徳や狡猾ぶり、道徳的堕落が強調される。犬儒テアゲネスが、上記のような悲憤慷慨をしてみせる当時の、少なくとも内政的には平和だった「五賢帝時代」(この頃はマルクス・アウレリウス帝の代)にそういう点からも適合する文学トポスと言える。ヘシオドスの五時代神話は、後述するが、黄金種族が死後に守護者ダイモンたちになるという説でも、ペレグリノス一党によって利用されている。

時代への慨嘆と非難は、挑戦的な新宗教を興す者が常套的に用いる、導入的な文言であるが、彼らの本題は、言うまでもなく、新しい教えや、時代の風潮と対比される教祖の高邁さ、神々しさである。テアゲネスも、そういう一網打尽的な罵倒の後に、

> その絶叫は最後にプロテウス［ペレグリノスの別名］の話に行き着いた。(3章)

絶叫的な口調をそのまま保ちながら、自分の先生の称賛演説をとうとうと弁じ展開する。

> 「誰が臆面もなくプロテウスを」、と彼［テアゲネス］は弁じた、「虚栄心の強い男と言うだろうか、大地に、太陽に、河々に、海に、［われらの］父祖たるヘラクレスよ！　シリアでは［教義のゆえ官憲に］捕縛され、故国には五千タラントンを譲り渡し、ローマ市からは［その教えのゆえに］追放された男、太陽よりも際立った存在で、オリュンピアの神［ゼウス］自身にも張り合える男である彼を？　火［焼死］によってこの世を去ろうと彼が決めたことを、虚栄心に帰する者がいるだろうか？　ヘラクレスがそうしたではないか？　アスクレピオスやディオニュソスが、稲妻によって、そうしたではないか？　エンペドクレスは最後に［エトナ山の］火口へ飛びこんだではないか？(4章)

(2) ペレグリノスの焼身の企て

このテアゲネスの演説でも中心的話題になっているように、ペレグリノス、別名プロテウスという犬儒派（キュニコス派）の男が、この派の精神的祖先とされるヘラクレスのように、自らわが身を焼く企てとその経緯が、この『ペレグリノスの最期』では記述されている。犬儒派という邦語は、「キュニコス（複数キュニコイ）」の訳で、本論ではとりあえずこれを利用するが、ほんらいは「犬のような一派」という意味である。この「犬」というのは、お行儀のよい、大事にされるペットではもちろんなく――家族の一員的に飼われる例が古代にも珍しくはなかったが――、むしろ野良犬のように除け者にされ、軽侮されつつも、人間社会の法（のり）、掟や常識にあえて背き、アウトロー的な自然児の視点から世の虚妄や形式的因習をただし、自らもそういう破天荒な生き方を実践しようとした哲学流派である。弊衣、はだしで、頭陀袋を肩から下げ――その中に常食用の質素なハウチワ豆などを入れ――、杖とともに歩き回りつつ、ぜいたくを目の敵（かたき）にし、労苦を説く彼らは、やはり生涯にわたって世界各地を転々としながら苦しい難行を果たしていった棍棒持ちの英雄ヘラクレスに自分たちの神話的モデルを見るが、事実上は、ソクラテスと同世代のアンティステネスあるいはディオゲネスが最初の犬儒である。それはともかく、彼らの模範のヘラクレスは、苦難に満ちた人生に自ら終止符を打つべく、ギリシア中部オイタ山で薪山を築かせ、火をつけて、その上に横たわる自分を焼き殺した。しかしその後神々は、彼の生前の功績を評価して天上に彼を迎え入れ、神々の一員にしたと伝えられる。

この英雄を見習ってペレグリノスは焼身自殺を実行し、彼の言い分では、死を軽侮すべきことを身をもって示そうとするのだという。また、テアゲネスを初めとして、彼に心酔する取り巻き連がけっこういて、死後ペレグリノスは神々の仲間入りをすると持て囃す。しかもこの騒動が、各地から人が押し寄せるオリュンピア（オリンピック）競技のまさにその時期、その場所で起きているので、とてもセンセーショナルな話題になりつつあったのである。テアゲネスの演説で、師の焼身の企てを誰が虚栄心に帰するだろうかと繰り返し否定しているが、逆に言えば、それだけペレグリノスを非難し愚弄する声もたくさんあったということで、本書の後の方でも、ゼウス神殿の後陣（広間）で、ペレグリ

ノス本人の演説を聴きに集まった人々の間で、非難する側と称賛する側とのにらみ合いが生じ、取っ組み合いにもなったと記されている（32章）。

(3) ペレグリノス・プロテウスの多彩な経歴

「太陽神よりも際立っている」というペレグリノスの華々しい過去に言及しつつ、弟子はここで一貫して、プロテウスという別称を彼に適用している。神話上プロテウスは、ホメロスによって、

> 彼は、ありとある姿になって、[自分を捕まえようとする者から]逃れようとするだろう——
> 地上を行くものたちや、水や、神々しく
> 燃える火になりながら。(『オデュッセイア』Ⅳ. 417以下)

と語られるように、変幻自在の変身能力を持つ海の怪物である。さらに彼には予言能力があり、このホメロスの箇所では、スパルタ王メネラオスが彼を押さえつけて離さないので、逃れようといろいろ変身するが、最後にあきらめて、彼の願いどおり過去、未来のことを語ってやる、という続きになっている。ペレグリノスは、ルキアノスによると、この名を自らつけて得意になっていたという（1章）。この名を選んだのは、変身と予言の両点に関係するらしい。

後でより詳しく述べるが、彼は、死後に託宣神となって（変身して）、人々に予言を授ける身になることを夢見ていたらしい。これは、後に彼の故郷パリオン（小アジア、プロポンティス［マルマラ］海南岸）で実現する。他方彼は、帝国各地を転々と経巡りつつ、さまざまな運命に出会ったことを誇りにしていたようである。もともと犬儒派には、「流浪者の誉れ」という意識があり、たとえば、ストア派でもあり犬儒派的でもある弁論家ディオン・クリュソストモス（一から二世紀）も、不遇な時期の自分の乞食的な放浪生活をいささか自慢げに記している。ディオンは、ドミティアヌス帝（一世紀）に睨まれて追放処分を受け、故国プルサを離れて遠くまで（黒海北岸にまで？）旅したが、後にネルウァ帝（一世紀末）に許されて名誉を回復した。プルサ（現トルコ・ブルサ）の貴族から、流浪乞食同然の身になり、ふたたび故郷の地所に帰りついたディオンも、こういう点で「プロテウス」の名にふさわしいと思えるが、ペレグリノス・プロテウスも、シリア（パレスチナ）ではキリスト教徒のリーダーとし

て重きをなしていたとき捕縛され――キリスト教に入っていたということはテアゲネスの演説では言及されないが――、故郷のパリオンでは国に多額の贈与をして恩恵者となり――五千タラントンという巨額な金ではなかったとその演説の後に発言する「無名氏」から反論されるが――、ディオン同様ローマ市から――アントニヌス・ピウス帝のとき（二世紀）に――追放される身となり、といった波乱に富む体験を諸所方々でしてきたという多彩な人生を、しかも追放という処罰もその経歴に箔をつけているという口吻で、この弟子は称揚し、今このときも聴衆の頭上で輝いている「太陽よりも際立った存在」とまで言うのである。冒頭の「大地に、太陽に、河々に、海に、父祖たるヘラクレスよ」という句は、広く神々や自然的神体に、証言者として照覧あれ、と呼びかけているが(『イリアス』III. 277参照)、さすらいの英雄ヘラクレスへの言及も含め、ペレグリノスのそういう広い放浪の履歴を想起させようとする表現にもなっている。そして弟子の誇張的賛辞は、先生を「オリュンピアのゼウスにも匹敵する」とまで持ち上げる。この比較を彼はその後でもう一度口にし、とにかくこの点を声を大にして唱えようとするのである。

(4) 火（稲妻）に聖化された者たち

また弟子は、ペレグリノスの焼身の試みを讃美し正当化しようとして、「ヘラクレスがそうしたではないか？　アスクレピオスやディオニュソスが、稲妻によって、そうしたではないか？　エンペドクレスは最後に火口へ飛びこんだではないか？」と言う。ヘラクレスの最期は上記のようにじっさい彼の企てのモデルになりうる。最後に挙げられる哲人エンペドクレスの死については、縊死したとか、溺死したとか、さまざまな説があったが、前二世紀からは、ここで触れられる、エトナ火口に飛び込んだというのが、真実かどうかは別として、通説となった(1)。ルキアノスも、焼死した後のペレグリノスは「エンペドクレス式に炭になった」（1章）と愚弄的に表現しているが、その伝説を前提にしている。アスクレピオスやディオニュソスについては、ある論者によると、ここで引き合いに出すのは不適切である、という。なぜなら二人はペレグリノスのように自分から焼け死ぬのではなく、前者は、自分の医術で死者を生き返らせることまでしてしまった不遜のゆえにゼウスの雷電に焼き殺されたのであるし、後者は、本人自身ではなくその母セメレが、天空・稲妻の神ゼウスの真の姿を見たいという大それた願いを抱いたがゆえに、やはりそれに打たれて死んだ女

性であるから――ディオニュソス自身は、ゼウスによって孕まされていたセメレの胎内からそのときに救出された――、という。そしてそういう不適切な引用によってテアゲネスの弁が滑稽化され、ルキアノスや読者の視点から揶揄される、と解する(2)。しかし、人間が死後に聖化され英雄（英雄神）になるという場合――ペレグリノスはそういう夢を抱いているわけだが――、その人物の生前の行いが必ずしも厳密に神学的倫理学的な論理で検証され認定されるわけではなかった。彼(彼女)の非凡な力や知性の示現、あるいは人知を越えた異常な運命の経緯に、超人間的なるものとの関与や近さが感得されれば、崇拝を捧げるに足る対象と見なされたのである。極端な場合は、「偉大」な山賊も英雄に聖化されえた。アスクレピオスは医術の神として崇められ、セメレの墓も聖所となった。またディオニュソスも、燃える母体から取り出されたという点で、テアゲネスの喩えに不適合な例ではない。ペレグリノスの焼死の企てに、このような神話的祭祀的諸例の箔が付けられようとする。

彼は、艱難辛苦の人生をヘラクレス的に耐えてきたあと、その多彩な人生の最後の仕上げとして（33 章参照）、英雄のようにわが身を焼き、不死の神々の一員となって（29 章等）、死の恐れを克服することを（23 章）身をもって教えようとしていると言われる。

(5) オリュンピアのゼウス像とペレグリノスの像

その後、テアゲネスの弁の締めくくりの部分が次のように引用され、彼の退場の様子が記される。

> それでわたし［ルキアノス］は、彼が演説の残りを人々にどっと浴びせながら、驚くべき誇張の言葉をプロテウスに向かって並べ立てるのに聴き入った。彼は、シノペウスの人［犬儒ディオゲネス］やその先生のアンティステネスについては、彼［ペレグリノス］と比べることさえ価しない、いやソクラテス当人ですらそうだ、と言って、ゼウスを彼との勝負に呼び出そうとした。しかし、それから、両者をほぼ同等[の名誉]に保っておくのがよいと考え、次のように演説を終えた。
>
> 「このふたつを」と彼は言った、「世の中は、もっともすぐれた製造物として眺めたのである、すなわちオリュンピアのゼウス［像］とプロテウスを、とである。それらを彫塑し作り上げたのは、一方の場合は［彫刻家］ペイデ

ィアスであり、他方は「自然」であった。しかし、今やこの像［ペレグリノス］は、人間の中から神々のもとへ、炎に乗って運ばれようとしている。そしてわれわれを孤児の境遇に残しておくのだ」。こういう言葉を彼は、大汗をかきつつ述べながら、とても滑稽な姿で泣いていた。また自分の髪を引き毟っていたが、あまり強くは毟らないよう手心を加えていた。そして最後に、その間じゅう泣きじゃくる彼を、いくにんかの犬儒が、励ましの言葉をかけつつ、連れ出していった。(5 - 6 章)

「像」の喩えと比較は、オリュンピアの有名なゼウス像に関連して用いられている。ゼウスの聖所たるオリュンピアのその神殿に、アテナイ人彫刻家ペイディアス（フィディアス）の手になる十三メートルの座像が、象牙と黄金で飾られた姿で据えられていた。「世界の七不思議」と言われたもののひとつで、その巨大さもさることながら、大神の威厳と高貴さを完璧な技で表わしていると人々に感嘆されたのである。

テアゲネスは、犬儒の師たち、ディオゲネスやアンティステネスはもちろんのこと、後者の先生とされるソクラテスすらも比較の相手には不足だ、ゼウスこそ―この神に守護されるオリュンピア競技になぞらえながら―ペレグリノスと名誉を競う敵手にふさわしいとまで口を滑らすが、さすがに両者の優劣を付けるのは大胆過ぎると感じて、同等としておく。

『「図像」の弁明』という作品ではルキアノスは、人間を神自身に喩えるのは行き過ぎだが、神の像と比較するのは不敬ではないとしている（23 章）。テアゲネスも、まずはオリュンピアでの神の像を比較の対象に考えているのだろう。しかし『「図像」の弁明』では、人間を理想的に表現、提示するさいに、麗しい神像を模倣するのは許されるという趣旨で言われているわけだが、ここのテアゲネスの弁では、神の像がほとんど神自身と同じ資格で扱われ、その神と師の「像」とを存在論的な次元で並べているように思われる。ペレグリノスを「自然」が作った「像」と表現するのは、ひとつにはおそらく彼の美しく整った外見を言おうとしているのであろうが、そういう人間ならぬ「自然」の製作物が、炎に乗り、神のように天空に舞い上がり、神々の間に入るだろうと言うのである。こういう「像」は、単なる不動の物体ではなく、ほとんどそれ自身が生ける魂を有する存在になっている。たとえばルキアノスの『シリアの女神について』で、「神像は汗をかき、体を動かして託宣を与えるし、聖域が閉じら

れたのち神殿のなかで叫び声がすることがよくあって、云々」（10章）と、（諷刺作家の目から皮肉的に）記述される。これはシリアの宗教に関する書であるが、そこに限らず、このような観念は当時の宗教に見られた特徴のひとつである。アテナゴラスという二世紀のキリスト教護教作家は、ギリシア的ローマ的宗教への批判の中で、上記のようにペレグリノスが死後に、望みどおり、託宣神となったことを証言しているが、英雄神の像の表わす効験に関して、そういうしるしを示す存在すなわち神霊と、その像によって称揚されている人間とは別々のものであるはずだという趣旨の発言をしている(3)。裏返せば、神霊と像の同一視が一般的に行なわれていたということである。テアゲネスの弁においては、片やゼウス像によって表わされる大神、片や自然が作った「像」ペレグリノスとが並列されている。

(6) 感涙にむせぶ人々

もちろん、ルキアノスのように皮肉な視線を向ける者にとっては、これらは驚くべき誇張、あきれるほど誇大な賞賛であり、滑稽な僭越ぶりである。この点に限らず作者は、このペレグリノス事件全体に関して、本人をもその弟子たちをも、愚者のきわみと嘲る。そして当時の読者も、作者とともに笑うよう期待されている。しかしテアゲネスのほうは、少なくとも一見すると、ごく真剣であり、師の高邁な決意や彼との死別を思って感極まった、という様子を見せ、「泣きじゃくりながら」連れ出されていく。

ペレグリノスを賞賛し、その生き方や教えのゆえに感涙に駆られる者はテアゲネスにとどまらない。オリュンピアで師自身が群衆の前で演説したとき、彼をやじる者もたくさんいたが、

> 愚かな者たちは涙を流しつつ、「ギリシアのために死なないでほしい」と叫んだ（33章）

という。彼の行くところ、お供の崇拝者がいっぱいついて回るという状態になっている。彼がとうとう焼身を遂げたときは、「犬儒の者たちは、薪山の周りに立ちながら、泣いてはいなかったが、火を覗きこみつつ、沈黙のうちに悲しみを表わしていた」（37章）と描写され、彼らの深い悲嘆の情が、その場で「笑いをこらえることができなかった」と自ら言う愚弄的観察者ルキアノスからそ

う報告されるだけに、かえって読者に迫ってくる。

(7) 狂言回しとしてのテアゲネス

しかし実は、ルキアノスの見るところでは、テアゲネスは食わせ者である。ペレグリノスのこの一番弟子は、彼らを「孤児」にして立ち去ろうとする師との離別を嘆き、大汗とともに涙を流しては、髪も掻き毟ったが、あまり強く引っ張らないよう自分に手心を加えていたと言う。この言葉だけを見ると、ルキアノスからの悪意的な邪推や歪曲に思えるかもしれない。しかし、他の箇所では、師の焼身を取っ掛かりにしてテアゲネスが宗教組織的な発展を画策していることが語られている。以下の話し手は、テアゲネス退場の後に演壇に登った男で、ペレグリノス一党を批判し愚弄する側に属するが、名は記されない「無名氏」である（作者の影武者的人物と考えられる）。彼は、ペレグリノスの死後に彼への崇拝が起こって、ある程度広まるだろうことを見通す。

じっさいのところ、十分あり得ることだが、たくさんいる愚か者の中に、彼［英雄神となったペレグリノス］のおかげで四日熱［マラリア］から解放もされた、夜の番人たるこの神霊に夜中に出会いもした、と語る人々が現れてくることだろう。また、こういう、彼の呪われた弟子たちが、きっと神託所すらも、また奥殿も、その［彼の焼死した］薪山のそばに拵えるに違いない。なぜなら、彼の名前の祖、あのゼウスの子プロテウスも予言者だったからである。誓って言うが、鞭や焼き鏝や類似の虚仮おどしを用いる神官たちも任命されるだろうし、さらには、夜の秘儀や薪山のそばの松明担ぎの式も彼のために催されるようになるであろう。

わたしの友人のひとりが伝えてくれたのだが、テアゲネスは最近、シビュッラもこのことについて予言していると述べた。現にその言葉をこう引いてみせるのだ。

だがプロテウスが、なべての犬儒のうちもっとも優れたこの男が、
轟きわたるゼウスの神域で火を燃やし、
炎の中に飛びこんで、オリュンポスの高みに至ったときは、
そのときは、耕作地の実りを食する者全てひとしなみに、
夜行する最大の英雄を、

ヘパイストスまた主ヘラクレスと並んで座を占める彼を、敬うべし。
(28 - 29 章)

シビュッラたちは、非常に古くからその存在が伝承される女予言者ないし巫女の集団である。カンパーニア地方、ナポリ近くのクーマエに住むシビュッラの予言書が、ローマ最後の王タルクィニウス・スペルブス（前六世紀）によって購入されたと言われ、それ以降公的な重大な問題についてローマ人に指針を授けてきた。もともと椰子の葉に記されていたというその予言集は、この当時は、ローマ・パラティヌス丘にあるアポロ神殿に保管されていた。ただしシビュッラは各地にその存在が伝えられ、もともとギリシアのエリュトライ（小アジア西岸の町のことらしい）が生誕地と言われる。テアゲネスらが得たという託宣は、後述するようにその真偽はともかく、ギリシア産のものということであろう。いずれにせよ、古い由来談によって、またローマ帝国の国家的保護もあって、大きな権威を確立している予言者が、焼身後のペレグリノスへの崇拝を命じていると言うのである。

しかもその崇拝を受ける仕方やランクも並みのものではない。神々の住まいオリュンポス山に至り、鍛冶神ヘパイストスや英雄ヘラクレスと座を並べるというが、これはふつうの英雄神には認められない特別待遇である。上記のとおり、生前に際立った働きを示したり、運命を享受した人間が英雄神となりうるが、その存在次元は、天上の神々に対する地下神の位置づけであり、墓が彼らの住まいであって、けっしてオリュンポスではない。「英雄にして神」と称されるヘラクレスだけが（他にはせいぜいディオニュソスだけが）、誉れ高い例外として、オリュンポスに昇り、神の一員に迎えられたのである。大儒ディオゲネスたちなどは比べものにならない、と言われたペレグリノスは、この派の祖ともされる、英雄にして神たるヘラクレスと天上において肩を並べるというのである。

さらに、やはり天で肩を接するだろうと言う鍛冶神などが表わす火の要素が、「夜行」という、上記の「夜の番人」という称号と関連する夜間の活動と互いに組み合わされ、他の多くの英雄神とはこの点でも区別されることになる独特の権能領域や種類が予告される。

この予言は、シビュッラの権威を利用するテアゲネスたちが捏造したものである疑いが強い。神託のでっちあげは古来行われている。有名な例としては、

ヘロドトスが記しているもので、アテナイの占者オノマクリトスが、ペルシアの勝利間違いなしという趣旨の偽の託宣をペルシア王クセルクセスに繰り返し語って聞かせ、他の要因もあったろうが、とうとうギリシア遠征に踏み切らせた、という話がある（『歴史』Ⅶ. 6）。この場合は、アテナイからペルシアに亡命してきたペイシストラトス一家による政治的画策が陰で働いていた。テアゲネスの一派は、それを新たな宗教組織の構築に役立てようとしているというのである。

さて、シビュッラの予言なるものをそのように又引用する「無名氏」は、それに対抗するように、別の予言者の「託宣」をものものしく持ち出してくる。

こういうことをシビュッラから聞いたとテアゲネスは言っている。しかしわたしは、バキスがこれに関して述べた託宣を彼に話してあげよう。その件の事後のことで、バキスはとてもよいことをこう言っているのだ。

だが、この名多き犬儒が大きな炎の中へ、
名声欲に心を狂わされ煽られて飛びこんだら、
そのときは、彼につき従う他の犬狐どもは、
逝った狼の運命を真似ねばならぬ。
臆病にも、ヘパイストスの力から逃れようとする者は、
すぐに全てのアカイア人により石打ちの刑に処せらるべし。
その者が、涼しい顔で熱弁を揮うことを企てたりしないように
――頭陀袋には黄金を詰め込んで高利貸しをし、
うるわしきパトライでは十五タラントンの財を貯めこんで。

あなたたち［聴衆］はどう思うか？ バキスはシビュッラよりも劣った予言者だろうか？ だから、プロテウスのお伴をするこれらの不思議な者たちは、どこで自分らを空気化するか――焼死を彼らはこう称するわけだ――、考えるべきときである。（30 章）

バキスはシビュッラの男性版であり、やはりその託宣を古くから喧伝されていた。ここで無名氏は、シビュッラ予言捏造の向こうを張り、その上を行くような巧妙な着想をバキスに基づいて駆使しながら、一党を愚弄して、その魂胆

を明るみに出そうとする。

「名多き」ペレグリノスというのは、犬儒でもあり、かつてはキリスト教徒でもあり、祖国に財を譲った「恩恵者」でもある等々のその経歴の（批判者にはいかがわしい印象を与える）多様さに関係するが、また、焼死を企む彼が、ペレグリノスやプロテウスという名には飽き足らずに、もう別の名を、つまり灰の中から甦る不死鳥ポイニクス（フェニックス）の名を、自分に付けて改名し（27 章）、さらに上記の「夜の番人」といった称号も自分に用意しているというマニアックな改名癖を揶揄する。それは「名声欲に心を狂わされ」ているからだという。ただ、ペレグリノスの視点から見ると、それは単なる世俗的な次元のものではないだろう。ギリシア宗教において神々は、まさしく「名多き」と讃えられた。それは、神の包括的な権能と勢力の広範さを意味する。英雄神を志願し、「予言者」の呼称も得ようとしているらしい彼が、名の多さにこだわるのはその故であり、意識して経歴の多彩を誇り、さまざまな名をわざと重ねてゆこうとしているのである。

しかし今の引用箇所では、師よりももっぱら弟子たちの魂胆を諷刺しようとする。犬儒の名称にちなみ、人を手玉に取って食り食らう狼に師を、また犬狐、つまり野良犬とずる賢い狐との合いの子に弟子たちを喩えながら、「涼しい顔で熱弁を揮う」テアゲネスたちが、先生の焼身をいわば元手にして「頭陀袋には黄金を詰め込んで高利貸しをし」、故郷のパトライ市（小アジア）で財をなそうと企んでいると当てこする。

「涼しい顔で（直訳：涼しい状態で）」というのは、自分では火炎から遠ざかったままで、という意味の他に、師の捨て身の教えには内心では冷淡な弟子たち、という毒気ある言い方であり、こういう点は、上で引用したように、師の焼身時には「犬儒の者たちは、薪山の周りに立ちながら、泣いてはいなかったが、火を覗きこみつつ、沈黙のうちに悲しみを表わしていた」（37 章）と愚弄的観察者から報告される文章と照らし合わせると、彼らに対する悪意的中傷と感じられるが、それはともかくとして、目論見どおりペレグリノスが死後に故郷パリオンで――テアゲネスの国パトライではないが――崇拝される身になり、人々に神託を与える存在にもなった、そして察するにその神域に財物が多かれ少なかれ貯えられるにいたった、というのは事実である。テアゲネスらが、師の抱負をよく理解し、その意を実現する共同作業者になったことは疑いない。

ルキアノスに言わせると、彼らのそういう一連のはかりごとは、一種の芝居、

大仰な悲劇である。

この事件［＝劇の物語］全体の演出はこうだった。この詩人［悲劇作家に喩えられるペレグリノス］がどんな男だったか、その人生全部にわたって彼がどれほど大掛かりな悲劇を、ソポクレスやアイスキュロスも顔負けというほどに、演じてきたことか。(3章)

という言葉で、俳優――ソポクレス等の作者が自ら役者もつとめるという慣わしがかつてはあった――が作品ごとに新たなマスクを着けるように次から次へ経歴を転々とし、多くの名を纏い、ドラマティックなストーリーを考案してオリュンピアの多くの見物人を相手に派手な死に方を演出するペレグリノスの人生を、総括的に劇的虚飾と評している。そして弟子テアゲネスは、主人公また主演俳優たる師に付き添い、補佐をする「第二俳優」に相当する（36章)。感涙にむせびつつ「あまり強く髪を毟らないようにしていた」とシニカルに言われるが、彼は有能なオーガナイザーであったろう。ひとつの宗教が興るとき、教祖の偉大な存在もさることながら、弟子たちのその後の布教活動が重大な働きをすることは、キリスト教におけるパウロなどの例でも明らかである。師が故郷パリオンで念願の「予言者」になったこの事件で、テアゲネスはこの劇の狂言回しをしっかり勤めたのである。

II．新宗教としてのペレグリノスの思想

当時の哲学――ストア主義、プラトン主義、新ピュタゴラス主義等――には、救済の強調やダイモン（神霊、魔神）への信仰などにおいて、宗教的な性格が強く認められる(4)。犬儒と称されているペレグリノスの思想についても同様なことが言え、しかもさまざまな派の宗教的要素が雑多に取り込まれている。総じて彼の思想は混淆的である。たとえば、彼は自ら託宣神を志願するが、犬儒派はほんらいは神託という宗教的伝統に批判的であった(5)。オイノマオスという犬儒は、デルポイ（デルフィ）のアポロン神託などを口を極めて罵倒している。

(1) キリスト教との接触

多様な経歴を閲してきた「名多き」彼は、キリスト教の思想にも影響を受け、それをも部分的に取り入れようとしたと思われる。

くだんの無名氏が、彼の多彩な履歴やプロフィールを聴衆に披露する。若いときに「間男」を働き、ひどい懲罰を受けた経験（9 章）もあるという。これは、上記の「自然が造った理想的な像」というテアゲネス的讃美を愚弄的に受ける形で、彼の色男としての側面を伝えるのであるが、この点は、後にキリスト教徒の間で人気を博したということにも関連するかもしれない。彼が投獄処分を受けたとき、キリスト教徒たちはその釈放に力を注いだが、それがうまく行かないので、牢内の彼の世話をかいがいしくした。

> 早朝から牢の前で老婆や寡婦や孤児たちが陣取っているのが見られた。彼らのうちの幹部の者たちは、牢番たちを買収して牢内で彼といっしょに寝ることもした。それから豪華な食事が持ち込まれ、彼らの聖なる書が読まれた。（12 章）

という記述は、お人よしの彼らをたぶらかし金持ちになった（13 章）という彼の狡猾な性質とともに、人を迷わす性的魅力をも暗示する筆致である（「いっしょに寝る」は同性愛的行為を匂わす）。船旅でたくさんの女たちを連れていたこともあったというが（43 章）、これも心酔する女信者たちだったのか、それとも単に遊女たちだったか。

遺産狙いで父を殺したという、トポス的な常套的な非難が、彼の場合正当であったかどうか分からないが、とにかく故国でそういう噂が広まり、出奔せざるをえなくなったという。その流浪が、キリスト教との接触につながるのである。

> この事件［父殺害］が世間でかまびすしくなると、彼は自分に亡命の罰を課し、流浪して各地を転々とした。このとき、キリスト教徒らの驚くべき知恵も学び取ったのである」（10 - 11 章）

彼がどこまで真正なキリスト教徒になったかどうかはともかく、そういう初期キリスト教団との関係が 11 から 14 章、また 16 章の二箇所で比較的詳しく語

られている。前の箇所では、これはまだ犬儒を称していない時期に属するが、そのように故国を出てパレスチナに滞在していたとき、教団に入ってその指導者として活躍し、このため当局によって投獄処分まで受けた、その間教徒たちが何くれとなく彼の世話をした――各地の信徒が彼のためにする醵金のゆえに彼は「少なからぬ儲けを得た」――、その後シリア総督によって釈放された、ということが述べられている。また後の箇所では、釈放されたのち故郷パリオンに戻り、そこで初めて犬儒派として現れるという記述をはさみ（14 から 15 章）、彼のキリスト教との再度の接点が述べられる。しかしこのときは、この犬儒を兼ねる「キリスト教徒」は、信徒たちにとって何かタブーになっている食べ物を口にしているのを目撃され、彼らから縁を切られたという。ちなみにこのタブーについては、「偶像に献げた肉と、血と、絞め殺した動物の肉とを口にしないように」といったパウロの指示を記す『新約聖書』の箇所が参照される（『使徒言行録』21. 25、新共同訳）。とくに「偶像」、つまりキリスト教徒にとって異教の神像に供えた肉のお下がりを彼が食べたということかもしれない、と解されている(6)。この成り行きからも、正真正銘の帰依だったとは思われないわけだが、それにもかかわらず彼は、知的なまた教団運営的な指導者として、すぐに頭角を現したのである。

このとき、キリスト教徒らの驚くべき知恵も学び取ったのである。パレスチナで、彼らの神官や書記（聖書学者？）たちと交わったときのことである。そしてどうなったか？ またたく間に彼らの幼さぶりが彼によって明らかにされた。彼は、預言者とか教団指導者とか会衆の長とかいったあらゆる役を一人で勤め、彼らの書のいくつかを解釈して説き明かし、自分でもたくさん書きあらわした。彼らは彼を神として崇め、立法者として扱い、庇護者とあおいだ。それは、彼らが今でも崇拝するあの男に――この新しい秘儀を世の中に持ちこんだという理由でパレスチナにおいて磔にされたあの人物［イエス］に――次ぐもてなしぶりだった。（11 章）

この箇所で、キリスト教内の地位や役職に関する用語がたくさん現れる。それらが何を表すか、そもそも、「無名氏」の口を通じてこう記すルキアノスの、当時のキリスト教の組織に関する知識は正確だったか、という議論が以前から行なわれている。「神官（ヒエレウス）」、「書記（グランマテウス）」、「預言者（プ

ロペーテース)」の諸語は、ギリシア・ローマの宗教組織一般に通用する言葉であり、用語としては問題はない。ただその職務内容はかならずしも明瞭でない。「グランマテウス」は、ユダヤ教的な用法では「律法（聖書）学者」を表わすが、初期キリスト教においてもそういう意味で用いられていたか、確かではない。「教団指導者」と訳した「ティアサルケース」は、あらゆる文献でここでしか見出されない用語であり、どういう役目の者か正確なことは分からない。「会衆の長」とした「クシュナゴーゲウス」は、リュシアス等古典作家の時代から使われている語だが、ここの文脈ではユダヤ教的な「シナゴーグ」の長、という意義を連想させる。かりにそうとすると、ユダヤ教とキリスト教の用語を混同しているか、という疑いもかけられている(7)。「立法者」（ノモテテース）については、そういう役職が初期キリスト教団にほんとうにあったか疑問であるとされる。「庇護者」（プロスタテース）は、ここの原文でも「登録する」という動詞と結びついているが、もともとはアテナイ市の在留外人が、自分たちの諸権利の保護者として市に届け出る市民の意であるが、ここでは比喩的な意味らしい。これらの語は、正確な専門用語と言うより、当時のギリシア・ローマ人にパレスチナ（イスラエル）の新奇な宗教が与えるエキゾチックな印象に合わせつつ、一般的伝統的な意味の範囲内で理解されうるように呈示されているとも解される。

しかし、ティアサルケースという特殊な語を用いていることは、むしろその使用者（無名氏、すなわちルキアノス）がこの方面に詳しいことを示唆するのではないか。クシュナゴーゲウスという合成語も、一般的な意味合いではあるまい。無名氏または作者が、ユダヤ教とキリスト教の用語を混同しているかもしれないというが、初期キリスト教にユダヤ教的な要素が多かれ少なかれあったことは疑いない。「彼を神として崇め、立法者として扱い、庇護者とあおいだ」というくだりだが、ケルソスによると、キリスト死後百年以上たった二世紀においても、自分を「神」または「神の子」と名乗る預言者がパレスチナにいたらしい（オリゲネス『ケロソスを駁す』8. 8）(8)。「立法者」は、『新約聖書』では、神を意味することがある（『ヤコブの手紙』4. 12）。他方ではこの語は、本書の 13 章では、「最初の立法者は、皆がお互いに兄弟であると彼らを説き、云々」という文章で用いられている。どうやらパウロのことを指しているらしいが、これは信徒たちの間の用法を反映しているに違いない。「庇護者」は、天国における信徒たちの保護者を表わすか。パレスチナないしイスラエルにおい

て、ユダヤ的な特徴も持っていたはずの初期キリスト教の仕来りや組織や名辞におおよそは則った記述がここにはあると見てよいと思われる。

無名氏は、ペレグリノスの経歴を聴衆に説明する前置きとして、「わたしは初めから彼の考え方を観察し、その生きざまを注視してきた。いくつかの点は、彼の同胞市民から、また彼のことを正確に知る羽目になった者たちのもとで、聞き知った」(8章)と述べていて、自分の情報の信頼しうることを唱えている。最後の部分の、「彼のことを正確に知る羽目になった者たち」という句は、上記のように彼を一時は崇めていたがその後裏切られたキリスト教徒たちのことを言うらしい。彼が述べること全てをそのまま受け入れることはできないとしても、そのように直接的な情報の収集を心がけたという主張そのものまで否定する根拠はないだろう。無名氏は作者の一種の影武者と思われるが、ルキアノスはシリア出身者として、小アジアやパレスチナの諸事情に疎くはなかった。本篇は、一部は、ドキュメンタリーの体裁を呈している。

さて、この箇所ではそのように、ペレグリノスが、入会した早々からその地の教団を牛耳って、各種の役目——「庇護者」等は職名と言うより名誉的称号と言うべきだろうが——を果たした活躍ぶりが表わされる。彼は、「キリスト教徒らの驚くべき知恵も学び取」り、「彼らの書のいくつかを解釈して説き明かし、自分でもたくさん書きあらわした」と言われるから、その教義にかなり通じて、一般信徒にも教えられるほどになったのである。具体的にどういう点をペレグリノスが「学び取った」か、詳しい説明はないが、例の、彼が投獄されたとき信徒たちが援助したという話の中の記述が参考になる。

> 彼らは［他の信徒への援助を決めると］ただちに全ての物を手放すのだ。かくてペレグリノスにも、そのとき、彼の捕縛のせいで、彼らのもとから多量の金銭がもたらされ、そのために彼は、こういう形で少なからぬ儲けを得た。哀れな彼らは、総じて、永遠に自分たちが不死となって生き続けるだろうと信じている。それで死をも軽侮し、大部分の者が進んでわが身を捧げるのである。それから、最初の立法者が、みなお互いに兄弟であると彼らを説得している——いったんギリシアの神々を否定して罪人となり、磔になった彼らのあのソフィストを崇めて彼の法に従いながら生きるのなら、と。それで彼らは、全ての物を等しく軽侮して共有物と見なしているのだが、きっちりした論証もなしにそういう説を受け入れているのである。(13章)

この箇所などでの「哀れな」信徒たち等の表現や記述は、のちに、キリスト教とキリスト自身を冒瀆しているとしてビザンツの僧を怒らせ、『スダ』事典などでルキアノス堕地獄説を唱えさせるきっかけになるが、その点は別に論じるとして、ペレグリノスが影響を受けた、あるいは共感を覚えた可能性のあるキリスト教教義という問題に関して、上記のように、オリュンピアにおける焼死の企てにより、死を軽侮することを彼は人々に教えようとしていると一派は言っている（そういう箇所とここの文とで「軽侮する」は同じギリシア語動詞が使われる）。そして彼は、死後、天上でヘラクレスらと並んで不死の生を享受すると唱えられる。ギリシアの伝統的な宗教観念においては、死後において、貴顕はともかく、ふつうの人間がヘラクレスのような巡り会わせに会うことは望まれず、ただ虚無的な存在になるとされていた。後でも触れるように、死後生に関して、より明るい希望がだんだん一般人にも広がってはいた。しかし、ルキアノスもここで「哀れな彼らは、総じて、永遠に自分たちが不死となって生き続けるだろうと信じている」と皮肉な調子で書いているように、長い伝統を持つ観念は容易には取って代わられないものである。「永遠に……不死となって生き続けるだろう」という教えを信者一般の間で強力に普及させたキリスト教は、死後の至福の民主化という宗教思潮にきわめて巧みに乗り、やがて大きな成功を収めることになる宗教である(9)。そして信徒たちはそのために「死を軽侮し」、さらに「進んでわが身を捧げる」と言われている。こういう点が、「死への軽侮」を人々に教え、またその手段としてヘラクレス的焼身を実行しようとするペレグリノスとキリスト教との間の重要な接点と考えられる。オリュンポスで至福を享受するヘラクレスという神話形象は、信徒の観念における天上のキリストに呼応させられることがあった。より細かい教義に関しても、「キリスト教徒らの驚くべき知恵」に学んでいるものがあるかもしれないが、そういう点は不明である。ただ、上記の、兄弟愛やギリシアの神々の否定という教義点は、その言説を見るかぎり、ペレグリノス一派の思想には無縁である。後者はともかく、「兄弟愛」はキリスト教にとくに固有の教えであり、それが取り入れられなかったということはやはり彼のエセ教徒ぶりを示す証拠といえるだろう。

(2) 新ピュタゴラス派の霊魂論の影響

ペレグリノスは、焼身を実行する何日か前に、オリュンピアのゼウス神殿で、自分の企ての意味するところを聴衆に説明した。

ヘラクレス的に生きた者は、ヘラクレス的に死んでアイテールに交わらねばならない、と彼は言った。「そして、どのような仕方で死を軽侮すべきか人々に示して、彼らの役に立ちたいと思う。だから、全ての人間は、わたしのピロクテテスになるべきだ」、と。(33章)

そして彼の焼身そのものは、月光のもと、弟子たちの見守る中で次のように行なわれた。

彼は、しじゅうそれを先延ばしにしていたが、とうとう焼身をして見せる夜を予告した。そして、友人の一人が誘ってくれたので、真夜中にわたしは起き上がり、薪山があるハルピネまで赴いた。それは、オリュンピアの競馬路から東へ向かうと、まるまる二十スタディオン［約3.7キロ］の距離にある。着くとすぐにわれわれは、およそ一オルギュイア［約1.8メートル］の深さの穴の中に薪山が築かれてあるのを認めた。それはだいたい松明から成り、横に柴を詰め込んで、すぐ燃え上がるようにしてあった。そして月が昇ると――月もこの素晴らしい行いを眺めなければならなかったのだ――いつものような装いをした彼が現れた。いっしょに犬儒の幹部たちがいて、とくにあの立派なパトライ人［テアゲネス］が松明を捧げ持って、なかなかの脇役（「第二俳優」）ぶりであった。そしてプロテウスも松明を持っていた。四方から歩み寄ると彼らは、松明と柴からできている薪山なので、とても大きな炎を燃え上がらせた。すると彼は、頭陀袋と、ぼろマントと、あのヘラクレス式の棍棒を脇に置き、ほんとうに汚らしい下着をまとった姿でそこに立ち、ついで、火の中に投げこむための乳香を求めて、渡されるとそれを投じ、南に顔を向けながら――なぜならこの南という点も、この悲劇には関係していたのだ――「母の、父の神霊（ダイモン）たちよ、好意をもってわたしを受け入れたまえ」と言うと、火の中に飛び込んだ。ただ、その姿は見えず、燃え上がっている多量の炎に包まれてしまった。(35 - 36章)

これらの箇所からうかがわれるペレグリノスの思想は、ストア派的ないし犬儒派的とも、新ピュタゴラス主義的とも言える性格を示している。ヘラクレスのように死んでアイテールに交わる、という言葉では、まず、犬儒派の神話的モデルたるヘラクレスが、その生全般において忍耐の範を示すとともに、オイタ山上での焼身自殺を通じて、生の終え方についても手本となった、ということを言おうとする。また自殺容認は他の犬儒やストア派にも共通する。たとえばデモナクスという犬儒は、老衰を悟ると、食を断って自殺した（ルキアノス『デモナクス』65 章)。ペレグリノスは、焼身という方法も英雄に倣おうとしている。

他方、アイテールに交わる、という主張――上記引用の無名氏の演説では、「空気化する」という表現でからかわれていた（30 章）――は、ストア派的とも新ピュタゴラス派的とも見なせる。死後に霊魂は、肉体を離れると、ホメロス的な神話的な考え方のように地下世界に降るのではなく、上方のアイテール――大気よりさらに上の清浄な圏域――に昇ってゆくという思想がここでは基礎にある。霊魂を「燃え立つ気息」とストア派は説いて、軽い要素であるから肉体から離れれば上昇するしかないと考えたし、新ピュタゴラス派も、それは「天空を満たし、神々しい星辰の中で光り輝く、燃えて発光する液体の流れ」であるアイテール(10)そのものの一部であり、肉体の死後その故郷に向かって上昇してゆく、としていた。

しかし、総じて汎神論的、自然学的な、したがって死後存在に関して非人格的な原理で説明しようとするストア派によりも、秘儀宗教的傾向のある新ピュタゴラス派のほうにペレグリノスの思想は、この点に関しては、親近性を持っているであろう。後の引用文で、「母の、父の神霊（ダイモン）たちよ、好意をもってわたしを受け入れたまえ」と呼びかけている。ダイモン信仰はとくに新ピュタゴラス派的な、プラトン主義的な特徴である。ダイモン（デーモン）は、魔神、鬼神と邦訳することがあるが、神と人間の中間に位置づけられ、両方の仲介をなす霊的存在と考えられた（キリスト教ではこの観念を二元論的に利用して、善いダイモンを聖書の天使と、悪しきダイモンを「異教」の神々と同一視した)。そして月およびその周囲にあるという大気が彼らの住まいとされた。ペレグリノスは、かつては父母だった者たちが今はダイモンとして住む場所に自分も行くことを予想している。ホールの解説を引くと、「彼は、……『人間を愛する善きダイモン』の一人になるだろう――転生の輪から解放され、肉体に

とどまっていた間に引き寄せた穢れから浄化されて月の上に住まい、そこからダイモンとしての資格で地上に戻っては託宣や秘儀の務めを果たし、いろいろなしかたで人々の犯行を罰したり守護したりするそういう存在の一人になるだろうと信じているようだ」(11)。ルキアノスの文で、「月もこの素晴らしい行いを眺めなければならなかった」というのは、月にいるダイモンとしての父母によく見てもらいたいというペレグリノスの希望を、皮肉っぽく記しているのである。

また、上記のいわゆるシビュッラの託宣の中で、「夜行する（ニュクティポロス）偉大な英雄」（29 章）という句は、そのすぐ前の「夜の番人（ニュクティピュラクス）たるダイモン」（28 章）を受けている。こういう句は、ヘシオドスが黄金の種族を語るさいに、彼らはその死後ゼウスの意図によってダイモンたちになり、地上における守護者として各地を歩行する、と述べているのを想起させる（『仕事と日』120 行以下）。このヘシオドスの箇所は、後にダイモンの観念が発達する拠り所の一つになるわけである。さらにこれは、「死者の伝令（ネクランゲロイ）」、「冥界の急使（ネルテロドロモイ）」（41 章）という名称とも関係するかもしれない。これはペレグリノスが、自分の「遺言、忠告、掟」を伝えさせるため、書簡とともに各地に遣わした使者たち（プレスベウタイ）の称号である。この名称は、アンティオコス司教イグナティオス（110 年頃殉死）の書簡に見られる「神の使者（テオプレスベウテス）」や「神の急使（テオドロモス）」という語に似ているので、ペレグリノスがキリスト教の知識を利用した一例とも解される(12)。他方、「冥界」は新ピュタゴラス派にとって、神話的な想像における地下世界ではなく、霊魂の上方への旅における最下層を意味した。「死が訪れると、霊魂は閉じ込められていた肉体から逃れる……この亡霊は数日間肉体の傍ら、あるいは墳墓の近くのどこかにとどまった後、風、水、火がせめぎ合う大気の中で上昇し、元素によって浄められた。宇宙の最も低い圏であるこの界域は、お伽話が地獄（インフェリ）と呼ぶところのものであり、詩人たちが三途の川（ステュクス）やその渡し守（カロン）の舟について語る時に言及するのは、この圏から次の圏への通過のことであった。霊魂が浄化されると、それは風に運び上げられて、月の天球層に至る」(13)。

こういう新ピュタゴラス派的な思想にくだんの「死者の伝令」や「冥界の急使」が関係するなら、つまりそういう霊魂の一時的滞在や圏から圏への「通過」の教えにそれが関わっていたのなら、この派とキリスト教との両方の影響がこ

こにはあると見なしうる。

(3) ペレグリノスの自死の「独創性」——ヘラクレスおよび鍛冶神の同朋

しかし、冥界という関連ではさらにヘラクレスの英雄的活躍が視野に入る。ペレグリノスと天上で隣り合わせになるだろうというこの半神は、冥界に降りてまた地上に帰還したという神話から、死や幽霊や禍の撃退者、アレクシカコス、という呼び名を与えられ、人々の守護者と仰がれた。家の入り口の上には、

> 華々しい勝利を誇るヘラクレスがここに住む。悪しき者、立ち入るべからず。

という銘がよく書かれた。ヘラクレスは力でそういう「悪しき者」を撃退するわけであるが、ペレグリノスはどうやら自分の託宣を通じて、禍を避ける方法を指示し、また秘儀的関連も含まれるなら、「冥界」の情報などを教示する心づもりだったのか。「死者の伝令」等の言葉が見える41章では、それらの使いが派遣された町々で彼の（半神としての）像が立てられるだろうと予言されている。少なくとも故郷パリオンではじっさいにそうなった。

これは、ダイモンというより英雄（半神）の崇拝に関係するとも言える。前者は、本質上、人間より次元が上（神より下）の存在であり、エンペドクレスが自分を「堕ちたダイモン」と表現したように、ダイモンのときに罪を犯して贖罪のため地上に追いやられたという場合もあれば、守護神としてそこで働いているという場合もある。他方、英雄は、他の者とは——通常はよい意味で——大きく異なる人生を生きた人間が、（伝統的な考え方における）死後の虚無的な存在を免れ、人間を超えた地位に上がるという者たちであり、そういう点ではダイモンと逆の方向の運命を味わうわけである。神と人間の中間的存在たるこの二つの種族について、神—ダイモン—英雄—人間というヒエラルキーの中で考えられることもあったが(14)、また両者が混同ないし同一視されることもあった(15)。神像として人々に託宣を与える自分をペレグリノスがダイモンと意識していたのか、英雄神と思い描いていたのかは判別しがたい（どちらも神託者になり得た）。オリュンポス神へパイストスの同輩という観点では、純化されたダイモンとして天上における滞在を自分は享受すると考えていたかもしれないが(16)、もう一人のヘラクレスはがんらいが英雄でありかつ神であるとされてい

た。上記のように彼だけが行った混同ではないが、英雄崇拝とダイモン信仰とが彼の将来設計の中で渾然と考えられていた可能性がある。28 - 29 章では、ひとつの文脈内で、ペレグリノスが「ダイモン」とも「英雄」とも呼ばれている。

ところで、天上でヘラクレスと同輩になるという運命自体は、すでに古くから、ヘラクレスの子孫を自称した人々、つまり一部の王族階級によって抱かれた夢想である。牧歌詩人テオクリトス（前三世紀）の第十七歌でも、神格化されたエジプト王プトレマイオス一世が、祖先たるヘラクレスおよびアレクサンドロス大王と宴を楽しむ天上生活の様子が描写されている。しかしヘラクレス的な死後の栄誉ないし至福は、時とともに、王侯貴族的にかくべつ恵まれた地位になくても、徳ある霊であれば、全ての者が掴みうる境遇であるという観念が広まっていった(17)。

しかし、ペレグリノスは、ヘラクレス的に独特な死に方によって彼同様の栄誉に到達すべきだと考えたようである。ひどい熱病にかかったとき、医者から、治療せずにほうっておけば、どうしなくても死ねるので焼身するまでもない、という趣旨のことを言われ、「それではふつうの死に方になってしまう」と答えたという（44 章）。ルキアノスは、ペレグリノスを動かしている大本は彼の名誉欲だと見ているが、単なる名誉心などから特異な死に方という点にこだわるというより、それによって初めてそういう栄光は真に達せられると考えたのであろう。

これは、英雄のオイタ山上での死という神話的伝承にヒントを得てはいるが、焼死という自殺法はギリシア・ローマ人の間ではまず実行されなかった。ペレグリノスは、スミュルナ司教ポリュカルポスの殉死に影響を受けたかもしれないともいわれるが(18)、これは自ら焼死を選んだというより、火刑に処せられた例である。むしろ、インドのバラモンたちにおける焼身の慣習に倣ったと見られる。テアゲネスが、師を讃える中で、インド僧カラノスのそういう行為を引き合いに出したという（25 章）。ペレグリノスは、オリエントの思想に触れる機会も多く存した国際都市アレクサンドリアに滞在していたことがあるので、そこでインドの宗教などを知ったという推測がされている。焼死のときに南面したという点も、祖霊の居場所を南に置くインド思想との関連かと言われる(19)。いずれにしても、死後ヘラクレスの友となるという、それ自体は新鮮味のあせつつある神格化観念に、ヘパイストス的要素、火焔による自殺という新機軸を加えようとしたのである。この点はまた、火を第一の根元的元素と見なしたス

トア派思想の影響もありうる。

(4) ペレグリノスの奇矯さを笑うルキアノス

克己や忍耐、勇気の鑑といった意味合いにおいてであろうが、ペレグリノスを称賛する声もなくはなかった。たとえば、犬儒になったあと彼はローマまで赴き、皇帝を非難する弁舌活動を行った、そして一部の拍手喝采を得た、という。

> それから［犬儒の弊衣的身なりで］イタリアへ航海し、船から下りるなり誰彼構わず罵り、とくに皇帝［アントニヌス・ピウス］を非難したが、それは彼がとても優しい穏やかな人であることを知っていたからであり、そういう思い切ったことをしても安全だったからだ。つまり皇帝は、正当にも、自分に向けられる誹謗にあまり頓着はせず、哲学の皮をかぶっている者を、とくに人への罵りを職業にしている者を、その言葉のゆえに罰するには及ばないと考えていたのである。しかしこの男にとってはこのことも、少なくとも愚かな者たちの間では、名声を増す一因となった。そしてその無謀さのゆえに有名になったが、とうとう市の長官をつとめていた賢明な人物が、そういう振る舞いを無際限にほしいままに行う彼に、この市はそういう哲学者を必要としていないと言って、追い出した。ところがこのことも彼の誉れとなり、率直な弁とあまりの自由不羈ぶりとのゆえに追放された男という評判が皆の口の端にのぼった。そしてこの［名望の］点において、［ドミティアヌス帝に追放された哲学者たち］ムソニオス、ディオン、エピクテトス、また他のそういう境遇に遭った者たちと肩を並べるようになった。(18章)

しかし、ここを含めてルキアノスの記述を見るかぎり、彼の言動に奇矯な面があることは否定できない。今の引用文で比較に出されたムソニオスらは、暴君的なドミティアヌス帝(51 - 96年)のことを恐れずに勇気ある発言をした哲学者たちであるが、ペレグリノスの件は、ここでも言われるとおり紳士的良識的なアントニヌス・ピウス帝(138 - 161年)の治世下であり、そのときの政府から追放されたということは、よほど目にあまる振る舞いがあったと推測される。そのとき、彼の「評判が皆の口の端にのぼった」と言われているのは、それがずいぶん話題になったという事実とともに、「愚かな者たち」の多さを誇

張的な表現で皮肉っているのだろう。少なくとも彼のこの評判はごく一時的なものであった。たとえば本篇がリアルタイムで語るオリュンピア祭では、上記のように、彼への批判者が半数はいる。

オリュンピアにペレグリノスが来たのは、焼身を遂げるこのとき（165年）だけではなく、すでに数度に及んでいた[20]。初めて来たのは、そのローマ追放の後のことである（153年か）。ここでも彼は物議をかもす言論を行ない、このときは総すかんを食らって石打ちのリンチを受けそうになった。

かくて彼はギリシアに来て、あるときは［オリュンピア競技を主管する］エリス人たちを罵り、あるときはローマに対して武器を取るようギリシア人を説得しようとし、あるときは教養と地位において抜きん出ている人物［ヘロデス・アッティコス］を、他の点でもギリシアに恩恵を施しているが、とくにオリュンピアへ水を引き、祭典の参加者が渇きで死ぬことのないようにしたという理由で、悪しざまに言った。それはギリシア人を軟弱にしてしまう、オリュンピア競技の観客は渇きに耐えるべきであり、ゼウスに誓って、これまでは土地の乾燥のゆえに多くの群集の間ではびこっていた猛烈な病に多くの者は死にさえすべきだ、と唱えたのである。ところが、そう述べながら、同じ水を彼は飲んでいたのだ。皆が走りよって彼を石打ちにせんばかりにしたので、この立派な仁はゼウス［の像］に難を逃れ、死なずに済んだ。（19章）

ヘロデスは、今日アテナイになお残るオデイオンなど、数多くの公共建築物をギリシア各地に寄進した超富裕者で、公的地位に恵まれ、弁論家としても名をなしていた。ここでは、オリュンピアに水道を引いた彼の功績に食って掛かる天邪鬼ぶりが伝えられている。

彼のこの奇矯な論はこのように反発と怒りを買ったわけであるが、ここですでに、火ないし熱を通じて栄光ある死後生に達するという思想や教義の一端がうかがわれるかもしれない。炎暑と渇き、熱病は、ストア派で第一因子とされる火の要素と通じるし、忍耐の強調はこの派や犬儒派の特徴的教えである。オリュンピアはゼウスの聖地であり、大神またその子たるヘラクレスのもとに達するために、この地の炎暑をむしろよい契機とすべきである、と言おうとしたのかもしれない。また「多くの者は」という言葉は、彼の布教への野心を感じ

させるといえる。したがって、彼なりにそういう思想に拠っているなら、単に突飛な内容の発言というわけではないのだが、いずれにしても一般の人が聞いてエキセントリックと感じたのは当然である。

ところでペレグリノスは、辞世の演説でこう述べた。

> どのような仕方で死を軽侮すべきか人々に示して、彼らの役に立ちたいと思う。だから、全ての人間は、わたしのピロクテテスになるべきだ。(33 章)

ピロクテテスは、ヘラクレスが焼身を遂げたとき手助けをした男である。これを劇にしたセネカの作で、薪山の上に横たわる英雄は彼にこう語りかける。

> さあ、ヘルクレスの友よ、ぐずぐずするな。オエタの山の燃え木を手に取れ。なぜきみは右手を震わせたのだ。……ひるんだわけではあるまい。……ヘルクレスと同じ顔つき、同じ勇気で松明を手に取ってくれ。焼かれようとしている者を見習うのだ。(『オエタ山上のヘルクレス』1717 - 1724、竹中康雄訳)

ここで英雄が、自分を見習え、と言っているのは、彼の肉体を焼く火を燃え上がらせる手助けを、彼自身と同じような勇気を持って臆せず実行せよ、というにすぎない。では、ペレグリノスが、「全ての人間は、わたしのピロクテテスになるべきだ」というのはどういう意味か。彼の焼身に立ち会う少数の人間以外は、それを手助けすることができない。「全ての」、彼の死以降に存在する人間皆が、彼を見習えという意義のこの文の前では、「どのような仕方で死を軽侮すべきか人々に示して、彼らの役に立ちたいと思う」と言っている。これは、他の人間も全て、彼のような死に方を選ぶべきだと言っているように解し得る。彼がかつてキリスト信徒の間でその次に敬われたという (11 章)、一種のライバルとしてのイエスの十字架上の死は、比喩的な意味での自己犠牲の意義を教えているのであろうが、信者の中には文字通り教祖の死に方に習った者が少なからずいた。この点もペレグリノスの意識にあった可能性がある。

こういう点を無名氏――ルキアノスのドッペルゲンガー――も、理の帰結として明らかにする。彼は、上記の偽神託の形を借りながら、師が焼身したら弟子たちもそれに習うべきだ、卑怯にもそれを避ける者がいたら石打ちの刑にし

ないといけない、と言って、ペレグリノスの教義の核心を把握しつつ、その実行を彼らに迫る。同時に、そういうヘラクレス的な勇気は当然彼らにはないだろうと見通している。いやむしろ、彼の見るところ、弟子は「涼しい顔で熱弁を揮」いながら、そういう布教活動を重ねることによって「頭陀袋には黄金を詰め込んで高利貸しをし」、故郷で「十五タラントンの財を貯めこ」む（30章）ことだろうと予想する。師の「殉死」を、ペレグリノス教の一党はそのように利用するだろうというこの毒舌は、犬儒派に対するトポス的な常套的な諷刺を含むが――もちろん清貧な乞食僧をてらうエセ犬儒的な手合いがじっさいにいたことも疑いない――、本篇のじっさいの執筆はペレグリノス崇拝がすでに彼の故国で現実化した後にされたものなので、そういう言葉は単なる悪意的予想というのではなく、一党の実際の活動のさまを見ながらそれを「予言」という形で記したものである。彼らがほんとうに莫大な財を貯めこみつつあったかは別として、その神託所が、上記アテナゴラスの記述からうかがわれるように多かれ少なかれ活況を呈していたと思われるので、醒めた観察者ルキアノスの苦々しい気持ちを誘っていたことはたしかである。

そのようにペレグリノスの殉死を、（作者の見るところでは）利得の基礎にしようとする弟子たちも諷刺されるが、主たるターゲットはやはり、焼死を中心主題として伝記を記すその人物である。

> 名声を得るためにあらゆるものになり、無数の変身を遂げて、最後には火となった。それほど名声への愛にとらわれていたのだ（1章）

というのが、彼の全生涯にわたる傾向とその原動力についての作者の理解である。ただし焼死行動などには、上記のように、彼なりの思想的根拠があったと思われる。いずれにしても、ルキアノスは、本篇の初めから最後までこの人物の愚かさを嘲りつつ、その奇妙な言動を暴き立ててゆく。しかし、上記のようにペレグリノスを評価する向きもあったのである。本篇の最後でこう記される。

> わたし自身、先ごろ、彼が目に薬を塗りつけ、その刺激的な薬剤で涙を出して洗眼しようとしている姿を見かけた。分かるかい？［彼の考えでは］目の弱い者をアイアコス［黄泉の裁判官］はなかなか受け入れてくれないのだ。ちょうど、磔台に上ろうとする者が、指の挫傷の治療をするようなものだ。

デモクリトス［笑う哲学者］がこれを知ったらどうすると思うかい？　当然彼のことを笑うのではないか？　だが、［その愚かしさに見合う］それほどの笑いをあの哲学者はどこから得られただろう？　とにかく、きみ［本篇での語り相手］のほうでも、わが友よ、笑ってやるがよい、とくに、彼を讃嘆する者の発言を聞くときにはね。(45章)

ペレグリノスを讃嘆する者、というのは、弟子たちには限らない。ルキアノスの嘲笑は、本書でその奇矯な言動を描写する宗教哲学者のみならず、キリスト教徒時代に彼を「神」として崇めたお人好しな信徒たちのように、彼を無批判に受け入れる人々にも向けられる。原子論哲学者デモクリトスは幽霊騒ぎを冷笑した。作者の嘲笑は、一般大衆の間の妄信への反駁という意味も持っている。

註

(1) Cf. W. R. Wright, *Empedocles: The Extant Fragments*, New Haven and London, 1981, p. 15ff.

(2) P. Pilhofer, in: *Lukian, Der Tod des Peregrinos*, heraugegeben...von P. Pilhofer, M. Baumbach, J. Gerlach, D. U. Hansen, Darmstadt, 2005, p. 52.

(3) Pilhofer, op. cit. p. 78 にアテナゴラスの文が載せられている。

(4) Cf. J. Hall, *Lucian's Satire*, New York, 1981, p. 175.

(5) Cf. Hall, op. cit. p. 499.

(6) Cf. Pilhofer, op. cit. p. 67. 彼はむしろ厳しい食事戒律を守ろうとした、という逆の説 (cf. Hall, op. cit. p. 500f.) は説得力に乏しい。

(7) Cf. H. D. Betz, *Lukian von Samosata und das Neue Testament*, Berlin, 1961, p. 8.

(8) ここの「神」の表現を「神のような人」の意とする Betz, op. cit. p. 9 の解釈は文脈に合致しない。

(9)「貧しい大衆、惨めな人々の大集団」に対するオリエント宗教の「よりよい希望」について、フランツ・キュモン『古代ローマの来世観』、小川英雄訳、平凡社、1996、p. 152 参照。

(10) キュモン、前掲書、p. 43。

(11) Hall, op. cit. p. 179.

(12) A. M. Harmon, in: *Lucian*, with an English translation by A. M. Harmon, V, London / Cambridge, 1972, p. 47.

(13) キュモン、前掲書、p. 44。

(14) Cf. M. Baltes, Dämonologie, in: *Der Neue Pauly*, Band 3, Stuttgart / Weimar, 1997, p. 266.

(15) Cf. M. Caster, *Lucien et la pensée religieuse de son temps*, Paris, 1937, p. 216.

(16) 新ピュタゴラス派では、霊魂は「月にとどまるかあるいはそこで溶解し、純粋な理性はその故郷である太陽へと昇っていくか、あるいは至高者が支配している天界の最高点に到達しさえした」（キュモン、前掲書、p. 44）と説いた。

(17) キュモン、前掲書、p. 149、248 等参照。

(18) Hall, op. cit. p. 178.

(19) Cf. Harmon, op. cit. p. 40f.

(20) Cf. Harmon, op. cit. p. 24 n. 1; Hall, op. cit. p. 443, n. 19.